

大きな木の根を張るように

土浦日本大学中等教育学校3年 高田 汐音

小学一年生の夏、私は心臓の手術を受けることになった。病名は「動脈管開存症」。小さな私には何もわからず、ただ漠然と怖く、大きな不安に包まれていた。私だけではなく、両親も不安は抱えていた。東京での手術は、高額な医療費だったからだ。そのときに両親が申請してくれたのが「乳幼児医療費助成制度」だった。この制度のおかげで、家計の負担となっていた医療費が大幅に減ったと後から聞いた。

当時の私は、まだその制度のありがたさを理解できなかった。しかし、学校の授業で税金について学んだ際、ふと「あの入院の時はどうだったんだろう？」と思い、両親に聞いてみた。すると、この乳幼児医療費制度は、私たちが住む自治体が医療費を肩代わりしてくれる仕組みであり、その財源は、私たち国民が納める税金によって賄われていることを教えてくれた。

この話を聞いて、私は大きな衝撃を受けた。私の手術は、見ず知らずの誰かが納めた税金によって支えられていたのである。それはまるで、深い大地に張り巡らされた根のように、目には見えないけれど、頑丈な基盤となって私を支えてくれた。私を支えていたのは、身の回りの大人だけでなく、社会全体の人々でもあったのだ。そのことを知った時、私は感謝の気持ちで胸がいっぱいになった。

これは私だけの特別な経験ではない。実際には多くの人が税に助けられたことはたくさんあるはずだ。例えば、普段私たちが使っている学校の机や教科書、そして安全な道路。これらも全て税金によって支えられている。税金は私たちの暮らしを陰で支える、人と人をつなぐ命の根幹である。

SNSなどでは「税金をなくせ」「増税反対」といった批判的な意見をよく目にするが、そうした意見を持つ人は、今一度税金について考えてみてほしい。なぜなら、私たちが納めている税金は、きっと誰かのことを助けていて、私たち自身もまた、税金によって助けられているからだ。税を納めることは、単なる義務や負担ではなく、人助けをしていることそのものである。自分が納めたお金は、巡り巡って誰かを救うことになり、その恩恵は自分自身にも返ってくるのだ。

私は改めて「税」という言葉の重みを感じた。それは決してマイナスなイメージを持つべきものではなく、誰もが安心して暮らせる社会の「基盤」だと捉えたい。私が成人して納める税金が増えた時、私はもっと多くの人を救うことができるのかもしれない。人と人をつなげる命の根幹、それが税金だと知った。支えられていた私が、今度は根となって誰かを支える番になればいいと思う。

誰かの納めたお金が、また別の誰かを支える根となり、その上に立つ木には、たくさんの実が付き、誰かの命を育む力になりますように。